概覧

社研だより

第94号

令和５年３月

発　行　京都市小学校
教育研究会社会科部会

責任者　京都市小学校
社会科教育研究会
林　　正　和

今年度をふりかえって

京都市小学校社会科教育研究会
副会長　栗栖ゆみ子

令和４年度の研究会活動も、皆様方のご支援・ご協力を頂きましたおかげで、無事にまとめの時期に入っております。コロナ禍により、集まって頂くことが難しかった研修会等も、今年度は、３年ぶりに開催する機会を得ることができ、大変嬉しく思いました。本当にありがとうございました。

５月に行った総会において、昨年度に引き続き林　正和先生を会長とすること、組織体制や事業計画等が承認され、令和４年度の研究会活動がスタートしました。８月の夏季研修会では、今年度の研究方針が提案され、研究主題を「『社会を見る目』を育む社会科学習」～学習したことを生かし、さらなる問いを追究する子どもの育成～としました。複数の単元を効果的につなぐことで、子どもたちの「社会を見る目」を育んでいくというものです。この日から各学年部会の研究会活動が本格的に始まり、研究主題に迫る授業実践を熱心に進めて頂いています。12月には、山階南小学校で研究集会を開催することもできました。当日は上口　洋平教諭による第３学年「市の様子とくらしのうつりかわり」の授業が公開され、子どもたちが生き生きと学ぶ姿を見ることができました。事後研修会では、研究部からの報告があり、その後、文部科学省よりお越し頂いた初等中等教育局教育課程課　教科調査官　小倉　勝登先生より、ご指導ならびにご講演を頂きました。

小倉先生のご指導の中に、「人の働きを共感的に捉え、自分事として社会にかかわろうとする子どもを育てるために、問題解決的な学習過程の、より一層の充実を図りたい。そのためには〝単元で考えること〟と〝問いの設定〟が極めて重要な意味をもつ。」というお話がありました。研究報告にある「社会の本質を見つめる問い」につながるお話ではないでしょうか。では、「社会の本質を見つめる問い」とはどのような問いのことなのでしょう。研究報告では、「社会的事象の意味や特色を考える問いである」と定義づけされています。授業研究において、私たちが一般的に用いる「問い」とはどのように違うのかをしっかり整理しながら、今後の研究を進めたいものです。

京都社研の魂である「問題解決（的な）学習」のさらなる充実を図りましょう。子ども自らが社会的事象から学習問題を見い出す授業や、子どもの疑問が価値のある学習問題に育っていく授業、そして、子どもが問題解決に向かう見通しのもてる授業が、今、求められています。

研究会活動は、私たち一人一人の心の内にある〝社会科教育に対する情熱〟を、さらに奮い立たせてくれるような場であって、そのためには、何のために、何をめざして、授業研究に取り組まなければならないのかが明確でなければなりません。その指針が研究主題です。主題を受けて何ができるのかを考え、それぞれが本気になって取り組むことで、めざしている姿に迫っていくのです。各部会において、成果があった取り組みでは、どういったところがよい変化につながったのでしょうか。見えてきた課題はどうすれば克服できるのでしょうか。振り返ることで、一つ一つの活動における意義や価値が明らかになると思います。社会科教育研究会の活動における〝切磋琢磨〟が、私たちを「学び続ける教師」に育ててくれるものと期待しています。

3年部会　「地域の人々の営みから学びを深め、自分と地域とのつながりを考える子ども」

本年度の授業実践
単元名　「火事をふせぐ」
向島秀蓮小中学校　門屋　大介教諭
葛野小学校　田中　百恵教諭

本単元では、火災から地域の人々の安全を守る働きについて、施設・設備などの配置、緊急時への備えや対応などに着目して、見学・調査したり地図などの資料で調べたりして、まとめる。それにより、関係機関や地域の人々の諸活動を捉え、相互の関連や従事する人々の働きを考え、表現することを通して、消防署などの関係機関は、地域の安全を守るために、相互に連携して緊急時に対処する体制をとっていることや、関係機関が地域の人々と協力して火災の防止に努めていることを理解する。その中で、主体的に学習問題を追究・解決し、学習したことを基に地域の安全を守るために自分たちにできることを考えようとする態度を養う。

研究提案に基づき、「事故や事件をふせぐ」と「火事をふせぐ」の二単元を俯瞰し、実践を行った。その中で、大切にしたことや成果と課題を、研究の視点ごとに報告する。

【方策Ⅰ】「社会を見る目」を育むために教材を分析する

「事故や事件をふせぐ」と「火事をふせぐ」の二単元を俯瞰し、学習活動をつなげたり、社会を見つめる問いを設定したりした。それにより、より広い視野で「安全なくらし」を守るための取組について、自分にできることを選択・判断する姿が見られた。

また、両単元の学習問題を同じような文型にしたり、同じように関係図を用いてまとめたりするなど、既習内容を生かしたり、学習活動をつなげたりするなどの工夫をした。これらは、3年生の子どもたちにとって、支援にもなり、よりよい学びに直結する方策でもあった。

【方策Ⅱ】「社会を見る目」を育むための授業を構想する

二単元の終末で、「もっと安全・安心なまちにするために、まちの人みんなで協力できることは何だろう。」と問い掛けた。子どもたちは、これまでの学習をふり返り、「大人の視点から」「予防の視点から」などと多角的に考えており、社会の一員としての自覚が芽生える問いになっていた。

しかし、「自分」だけでなく、「まちの人みんな」で協力できることを「社会を見つめる問い」の視点にしたことで、よりよい実践の可能性も感じられたが、3年生の子どもたちにとっては、地域全体に目を向けることへの難しさがあったことも実感した。問い掛け方や学習活動を工夫するなどして、今後につなげていければと考えている。

【方策Ⅲ】「社会を見る目」を育むためにふり返る

「社会を見つめる問い」を問い掛けるまでは、「安全なくらしをするために自分たちは守られている」という認識だったが、ふり返りの視点として「考えの変容をふり返る」を提示したことで、「自分たちにもできることがある」という思いに至る子どもの姿が見られた。3年生という発達段階にあっても、これまでの自分を見つめ、今の姿との変容を実感することができるという成果が見られた。

次年度に向けて

次年度は、今年度に見えた成果と課題を踏まえて、他の単元においても「俯瞰」の可能性を探り、実践を積み重ねていけるよう、部会での協議を充実させていきたいと考えている。今後も実践を重ね、子どもたちの地域に対する誇りと愛情、地域社会の一員としての自覚を育てられるようにしていきたい。

〈文責　下京雅小　上田　亮介〉

4年部会	「自分たちのくらしを支える人々のおもいや願いについて 学びを深めることで、地域社会に対する誇りと愛情をもち、 地域社会と自分とのつながりを考える子ども」

本年度の授業実践

・12月５日　「きょう土をひらく
用水のけんせつ
～琵琶湖疏水～」
桂東小学校　清水　一希教諭

方策Ⅰ：社会を見る目を育むための教材をつくる

「祇園祭」では、鷹山を約200年ぶりの復元させた。「琵琶湖疏水」では67年ぶりに疏水船通船を本格的に復活させた。異なる学習であったのにどちらも長い時間休止させていたものを「現代に復活」させることになった。それぞれの事実からその理由の問いを設けて調べることで学習してきた「祇園祭」「琵琶湖疏水」の良さをより理解できるた。このように、２つの単元の学習に「復活」という社会的事象を入れることで子どもたちが２つの単元の学習をつなげて見やすくした。

方策Ⅱ：社会を見る目を育むための問いをつくる

琵琶湖疏水が建設130周年を記念して2020年に日本遺産に認定されたことから、『なぜ琵琶湖疏水は日本遺産に認定されたのだろう』と問う。子どもたちは単元の学習を振り返り琵琶湖疏水建設のストーリーの中から日本遺産に認定された理由を考えた。その上で、前の単元で学習した祇園祭もユネスコの世界無形文化遺産に登録されている事実を伝え、遺産に登録された「琵琶湖疏水」「祇園祭」の共通点について子どもたちに話し合わせた。

「遺産」という共通点を問うことで、祇園祭に込められた人々の願いや、琵琶湖疏水の地域の発展に尽くした先人の働きなどの価値に再認識し、その社会的事象の特色や相互の関連、意味を考えることができた。

方策Ⅲ：社会を見る目の育ちを見取るためにふり返る

まとまりでふりかえることで、子どもたちの「遺産」というものに対する考えを表出することが出来、認識を明らかにすることができた。子どもたちにふり返らせることは、改めて思考させたり自分の認識を確認させたりするために有効であると感じたが、そのためには多くの時間が必要であった。単元の中でどの場面で何をふり返らせることが有効であるか今後も研究をしていきたい。

今年度は、複数の単元を俯瞰して教材研究をすることに重きを置いて「社会を見る目」を育む授業を構築していった。

次年度も子どもたちの「社会を見る目」を育むためにはどのような学習展開が有効であるのか、研究を進めていきたい。

〈文責　唐橋小　仙波　俊輔〉

5年部会

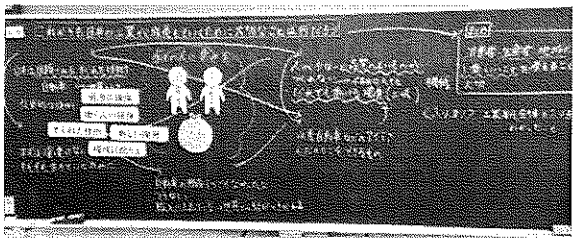
「社会のあり様や、そこに生きる人々の姿から学びを深め、
よりよい社会へ向けて、社会と自分とのつながりを考えようとする子ども」

本年度の授業実践

- 「これからの工業生産とわたしたち」
  岩倉南小学校　成宮未希子教諭
- 「環境を守るわたしたち」（3月予定）
  鳳徳小学校　田村　祐崇教諭
- 「環境を守るわたしたち」（3月予定）
  大宮小学校　内藤　和哉教諭

方策Ⅰ：「社会を見る目」を育むために教材を分析する

成宮教諭の授業実践では、方策１－２【複数の単元を俯瞰的に分析する】として、単元のつながりを意識し、子どもたちは蓄積した学びを活用し、学習のつながりを実感することを図った。学習指導要領から、「日本の工業生産」の学習では、「発展」や「国民生活の向上」というキーワードを読み解くことができた。これらのことから、日本の工業は、工業生産に携わる人々の工夫や努力によって支えられており、そして、工業生産の発展が国民生活の向上に重要な役割を果たしていることを理解することができるように学習を行った。そうした日本の工業についての理解を深める中で、様々な立場の人々の思いや願いがあること、そしてその実現に向けて取り組まれていることを子どもたちはとらえることができた。そして、本時では、それらの既習内容を活かし、これからの工業の在り方について多角的に考える場面を設定した。子どもたちは、「これからも日本の工業が成長するために、これまでの日本の工業の優れた技術を受け継ぎ生かしながら、消費者・生産者・地球の立場をもとに、未来のことを考えていくことが大切」ということに気づくことができた。このような、授業実践を進めることで、よりよい工業の在り方、望ましい工業の在り方を考えていくことができ、より深い学びにつながったといえる。



方策Ⅱ：「社会を見る目」を育むための授業を構想する

田村教諭の実践では、方策２－１－１【「社会の本質を見つめる問い」をつくる】として、１時間の授業の中で、調べてわかった事実から社会的事象の特色や相互の関連、意味を考えて、汎用性の高い概念の知識獲得を図った。本時では、『きれいになった鴨川を守り続けるために、どのような取組が行われているだろう。』という問いを立て、資料から調べる。〈鴨川を美しくする会〉の取組、①鴨川茶店・鴨川納涼の様子の写真　②鴨川の清掃活動の写真　③鴨川の環境学習を行っている写真　から、問いについて考える。考えを出し合う中で、新たな問い『なぜ杉江さんたち〈鴨川を美しくする会〉の人たちは、わざわざこのような取組をしているか』について考え、そのことがまさに、社会の本質を見つめることにつながるといえる。また、〈鴨川を美しくする会〉の代表である杉江さんに来ていただき、社会の本質に迫る問いについて答えていただく。このように田村教諭の実践では、社会的事象の事実から、その意味や特色について問うことが、１時間の授業の中での【「社会の本質を見つめる問い」をつくる】の実践であるといえる。

内藤教諭の実践では、方策２－１－１【「社会の本質を見つめる問い」をつくる】として、単元の中で、学習を積み重ね、様々な社会的事象の様子を理解したうえで、終末に「なぜ～だろう」と問うことで、社会的事象の意味を考えることができるように図った。『なぜ外国の人たちが四日市市の人とともに働いているのか』を問うことで、公害を乗り越えた経験を生かして世界の環境問題の解決について考える。

方策Ⅲ：「社会を見る目」の育むためにふり返る

毎回のふり返りでふり返る視点を持つことを大切に行ってきた。子ども達自身が自分の学びの成果を実感できる場面が見られたことや、教師自身が次時の学習に向けての指導の振り返りをし、活かすことができた。

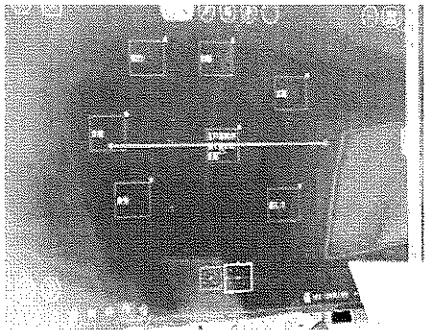
〈文責　紫野小　林　奈央人〉

6年部会　「社会の発展に寄与した先人や今を生きる人の営みから学びを深め、社会と自分とのつながりを多角的に考える子ども」

本年度の授業実践
- 11月９日　「江戸幕府の政治と安定」
  朱雀第一小学校　村地　勝成教諭
- 11月15日　「明治の国づくりを進めた人々」
  九条塔南小学校　洲崎　陽大教諭
- 12月14日　「世界に歩みだした日本」
  下京雅小学校　中川　清博教諭

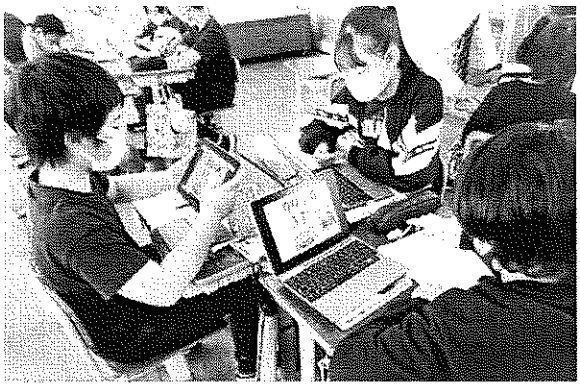
【方策Ⅰ】「社会を見る目を育むために教材を分析する

朱雀第一小学校　村地教諭の「江戸幕府の政治と安定」の単元では方策Ⅰの単元を俯瞰しながら教材を分析し、授業を構築していった。具体的には「武士の政治」というキーワードで鎌倉時代から江戸時代の政治を俯瞰的に分析した。子どもたちは各時代の武士が行ったことから時代を収めるために必要な要素を考え、次の時代との共通点やこれから先の時代にはどのようなことが大切になるのかを意識しながら、江戸幕府の政治についてそれぞれの考えを構築することに繋がっていた。



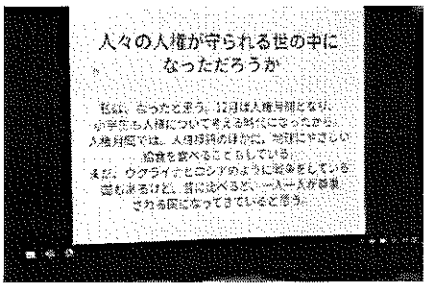
【方策Ⅱ】「社会を見る目」を育むための授業を構想する

九条塔南小学校　洲崎教諭の「明治の国づくりを進めた人々」の単元では「社会の本質を見つめる問い」を意識して取り組んだ。この単元では明治の新政府の活躍にスポットが当たりやすいと思うが、薩摩・長州の活躍に加え、幕末の江戸幕府の大政奉還や江戸城無血開城末の行動についても並列で調べた上でその意味を問うことで「どちらも日本の未来のことを考えての行動であることに気付かせるような授業の展開を構想することができた。



【方策Ⅲ】「社会を見る目」を育むためにふりかえる

下京雅小学校　中川教諭の「世界に歩みだした日本」では、民主主義運動が活発化した頃について調べる活動を行った。女性運動や普通選挙運動、水平社運動を取上げそれぞれの運動が権利を守るために行われたことについてまとめた後に、「水平社が創立100年を迎えた今の世の中の差別について」の考えを意図してふりかえる活動をいれた。そうすることで過去と今とを比べながら、これからを考える活動につながった。



３つの単元とも研究のテーマに則して新たな見方で授業づくりに取り組めたことが一番の成果であったと思う。しかしながら指導案検討の際に問いや俯瞰することに重点を置き、子どもに学んで欲しい内容がブレそうになったこともあった。そのことを踏まえると、やはり最終的に子どもたちをどんな姿に成長させたいのかを明確にする重要性を感じた。また、来年度の取り組みでも大切にしたい。

〈文責　安井小　柱谷　元紀〉